

BALLAD

1948

STUDENT STEEL
GUITAR & AMPLIFIER
SET



1948年、レオ・フェンダーが「ブロードキャスター」を世に送り出した年である。そしてそれは、ソリッド・エレクトリック・ギターの世界に於ける「元祖」とも言っても過言ではないだろう。

もちろん、それまでもエレクトリック・ギターのソリッド化という事は何人かの人々によって試みられていた。しかし、今から30数年も前のこと、楽器に対する認識も違ったことだろうか？ それらに対する評価もまた異なるものだったようだ。そんな状況の中で、レオ・フェンダーはソリッドのエレクトリックギターを商品化したのだ。これを「革命」と言わずして何と言おう。そのデビューが「革命」だったと同時に、このギターは随所にレオ・フェンダーの革新的なアイデアが盛り込まれていた。

さうまでもなく、ソリッドのボディはアッシュのワンピース。これによって、それまでのホロウボディのエレクトリック・ギターにつきもどったハウリングをカットすることに成功したのである。そして、メイプルワンピース・ネックが4本のスケルトンによってボディとポイントされるという、ザコッチャブル方式のネックジョイント。チューニングの便宜を考慮してペグを片側一列に配した、ユニークなデザインのカロケーションヘッド。

高音域と低音域のバランスを考慮して、角度をつけて取り付けられたリードピックアップと、カバードタイプのリズムピックアップという2ピックアップス。

しかし、このギター的设计思想は革新的なだけではなかった。Vシェイプのネック断面は、ジャズプレイヤーにも使ってもらえるよう、ジャズ・ギターのグリップにならったものだし、ユニークなピックアップアッセンブリー（ピックアップ・セクター）のリアポジションでリードピックアップ、セクターでストレートなリズムピックアップ、フロントでコンデンサーを通してハイカットしたリズムピックアップに、ハイカットしたリズムピックアップという甘いトーンが得られるポジションを設けた理由も、やはりジャズプレイヤーの使用ということを念頭にいた結果だ。

このように、幅広く使える楽器を目指していたということも見逃すことはできない。さて、話が前後するが、ブロードキャスター発表に至るまでのレオ・フェンダーの歩みについても軽く触れておこう。

サラリーマンとして働いていたこともある彼だが、大恐慌のおおりに失業した後、細々とラジオの修理などを始め、1930年には小さいながらもラジオ店を持つに至った。やがて、ハイアンプ・ミュージックのブームが訪れ、彼の店にもスチール・ギターの修理などが持ち込まれるようになった。この、スチール・ギターとの出会いが後

ポリ・ユーム 弾法

アタック音を出さないで弾くと、そこからバイオリン奏法とも呼ばれる。ポリ・ユームを0にした状態で、ピッキングして、右手の小指でポリ・ユームを上げてやる。これを一言一言について行うわけだ。つまり、小指は常にポリ・ユーム・ソフをキープし、音を上げなければならない。その点、ストロークと異なる。

ごく自然に小指が来る位置にアレイ・スタンプされているので、非常に都合が良いのである。

ドナルド・ダック・ダン

60年代リズム&ブルース史に於いて、おもしろいのは、ダックを担当したMG'sのボーリスト。非常にリアルなアレンジから、繰り出す重厚なアレンジメントは、アンサンブルを基調としたR&Bのバックには、最適なものであった。

アラン・ホールズ・ワイス 奏法

驚異の速弾きギタリストとして知られる彼だが、シンクロイスト・リズムを使っている。アーミー・テックも独特のものだ。アレックスの中核に込められているアーミング・サウンドは、アッパは不思議なアンサンブルを生み出し、彼特有のシンクロリズムをあいまいして、彼のスタイルは、彼のギター奏法とは一線を画したものである。

A

アット・オブ・フェイ・サウインド
かなり昔からブルースギタリスト達の間などでは知られていたのだが、日本でも有名になったのは、やはりエリック・クラプトンの使用に遡らう。ストラトキャスターのボジション・スイッチをリード・ミドル、あるいはリフト・ミドルの中間点にセットする（リフト・ミドル）と、得られる独特の音色のことである。

N

タイム・ボガード
一世を風靡したブルー・ジュー・ブギー・バンド・バック・ボガード&アピスのベース奏者。バックのギター、アピスのドラムに絡みつくような強烈なインタープレイはジャック・ブルースのプレイと並び称される。先進的なサウンドクリエイターでもあり、ディストーションを効かせたベース・サウンドが特徴で、ソロ・プレイ時にはフィードバックも聴かせた。

G

ジャコ・パストリアス

現在、ウエーリポートを拠点とし、ソロ活動中。愛用のバスは62年のシボレー・ベエスで、彼自身の手によってフレットレスに改造されている。プレイの音数はそのフレットレスによる。歌うようなプレイ・スタイルと人間味は、それは思えば、やはり、セージ。60年のフーラー・シボレー・ベエスによる。ナチラール・ハートリックと、人工的ニックスを組み合わせたトリッキーなプレイ。加えて、テラール・レイやアムスター・シン・ニートなども使用して、サウンドの幅を広げている。

T

スティーブ・ハリス

ブリティッシュ・ヘヴィメタルの旗手アイアンメイデンのベーシストであると同時にリーダーでもある彼のプレイは、常にバンドのサウンドをリードしていく。3フィンガーからくり出されるスピード感溢れるリフはヘヴィメタルそのものだ。

W

彼はアプレッションベースとフラットワウンド弦のコンビネーションにすることによって、勝手にプレイながら安定した重低音を得られるようにしている。

ジョン・ポール・ジョーシズ

解放してしまったブリティッシュロックの王者、レッドツェペリンを支えてきた男。同じジャズベースを使っているジャコとは対照的に、バックグラウンド重視のプレイを主とした。一見（聴）オーソドックスなプレイの中に、隠し味的に織り込まれている。実験的なプレイも見逃せない。

ジャコ・パストリアス

現在、ウエーリポートを拠点とし、ソロ活動中。愛用のバスは62年のシボレー・ベエスで、彼自身の手によってフレットレスに改造されている。プレイの音数はそのフレットレスによる。歌うようなプレイ・スタイルと人間味は、それは思えば、やはり、セージ。60年のフーラー・シボレー・ベエスによる。ナチラール・ハートリックと、人工的ニックスを組み合わせたトリッキーなプレイ。加えて、テラール・レイやアムスター・シン・ニートなども使用して、サウンドの幅を広げている。



Ballad of the Vintage.